The Japan Society of Educational Sociology

# 学校文化に現れた天皇(制)イメージ

## —『校友会雑誌』における「御大典」・行幸啓の表現から—

茂木謙之介(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)



本発表の目的は昭和戦前戦中期の校友会雑誌において天皇(制)に関わるイベントが如何に表現されていたのかを分析し、学校文化における天皇(制)イメージの位相を探るところにある。

学校文化における天皇(制)研究については戦後からの非常に厚い研究成果があるが、その中では法制度や社会構造、それを支える諸装置などの、天皇を元首とした国家システムがいかに所謂「天皇制公教育」を統御していたかが問われてきた傾向にある[i]。それら先行研究は近代日本の国家システム下の公教育の在り様を定位する試みとして重要な成果である一方、天皇(制)が具体的な学校生活・文化の中で如何に受容されていたのか、という点については、未だ検討の余地が残されているといえよう。

本発表では従来の学校文化と天皇(制)に関する先行論でも指摘のある天皇(制)イベントに注目し、それらが教員・生徒による表現のレヴェルで如何に描かれていたのかを明らかにすることで、学校文化における天皇(制)イメージを探った。天皇と天皇を元首とする国家システムの受容に関わる従来の問いは、「近代日本に深く浸透し、遍在した天皇制」という理解によって全体像の拡散したものになりがちであるが、本発表では天皇(制)イベントに関わって発行された校友会雑誌に焦点を絞り、そこに表出した天皇、皇族及び天皇(制)イベントそのものの記述の精読を試みた。いわば個別の事例における徴候に着目し、細部を解きほぐすことによってシステム的な理解に端的に回収されない様相を拾い上げることを目指した。同時に学校内メディアの中における表現の分析によって、本来困難な天皇(制)の受容の実証にある程度の接近を試みることが可能であろう。

考察にあたっては近代天皇(制)研究の中でも近年その成果の充実しつつある天皇(制)表象研究の成果を適宜参照した[ii]。「御真影」や「菊花紋章」、行幸啓などの天皇(制)表象に着目し、近代国家的な制度維持〈装置〉に重点を置いたこれらの研究は、個別実証的で動態的な研究として評価されているが、中央メディアの分析に留まる研究も多く、校友会雑誌という、同時代に於ある程度自在な表現を許し、限定的に流布したメディアの分析は天皇(制)表象研究の厚みを増すものともなろう。

本発表では個別の対象として、1928 年の昭和天皇の即位関連行事である所謂「御大典」および 1936 年から翌年にかけての秩父宮雍仁親王の青森県滞在(「御成」)に着目し、それら諸天皇(制)イベントに関連して発行され、イベント及び天皇(制)に関する教師及び生徒の表現が確認できる旧制中学校の校友会雑誌を中心に、適宜高等女学校や師範学校のそれも参照しつつ分析した。検討にあたってはまず全国レヴェルの事例として「御大典」に関連して編集された各地の校友会雑誌を検討し、その後よりミクロな地域レヴェルのそれとして秩父宮「御成」の事例を考察した。

『校友会雑誌』「御大典」記念号では、誌面に於いて天皇(制)イベントを前景化させつつも通常の校友会雑誌の内容と共存させる構成を採用し、図像表現では天皇と「御大典」をそのまま表象するのではなく、規制された中でぎりぎりの選択が為されていた。「御成」に関わる校友会雑誌では、「御大典」の際のように特別号が編まれることなく、通常



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

の外見を採用するものの、構成においては、例えば直接皇族の姿が映った写真を掲載するなど、「御大典」記念号以上に地域に来臨した皇族を意識した構成を取っていた。即ち天皇(制)イベントに特化した校友会雑誌は、メディアとしてそのイベントを編集のコンセプトとしつつも、校内情報を掲載し、一年に定められた数を発行するというスタンスを崩さず、それゆえに通常時と同じ校友会雑誌としての自律性を獲得していた反面、その扱いに関してはイベントの経験の仕方の差異から来るであろう反応の濃淡があったということができよう。また、イベント自体に一切触れない編集後記や、規範的な表現から逸脱する図像表現でも明らかなように、天皇(制)的なものへの表立たない隠微な逸脱の徴候をすら見ることができるのは注目すべきであり、まさに所謂「天皇制公教育」研究では見出し得ない様々の様相が指摘できる。

また文章表現について、「御大典」記念号の教員の言説は学校を経由する形で生徒を天皇(制)と結び付け、学校生活の質的向上を企図するものであり、その記述においては同時代によく見られる紋切型表現が反復されていた。生徒の言説については「御大典」を通して「国民」の一員として、必ずしも学校を経由しない形で天皇(制)と繋がる記述の様式が確認できたが、そこに於いても謂わば想像された天皇(制)を描く紋切型表現の反復の傾向が強固であった。それに対し、「御成」に関する校友会雑誌では、教員の場合「御大典」記念号の記述と同じく紋切型の反復を確認することができるものの、より実態的に学業や学校への利益との接続が図られており、生徒の記述においてもそれは共有された。その教員の言説の傾向に加えて生徒の記述では「御大典」の場合と同じく「国民」として天皇(制)と自らを直接つなぐ言説が見られたが、その際には地域性を媒介するという具体性を備えた記述がみられると共に、生身の親しみやすい皇族像という、実際に経験したことを率直に描く方向性が看取された。やや図式的にまとめるならば「天皇制公教育」のシステム側に存する教員による天皇(制)をめぐる表現は少々の振幅を孕みつつも紋切型とならざるを得ないのに対し、システム内の存在であっても生徒においてはある程度の自在な表現を行い、教員の言説から抜け出す余地があったといえまいか。それゆえ生徒の言説は徹底して時代性を反映するものであり、同時に非常に隠微な形ではあれ「天皇制公教育」から逸脱する余地を持ったのである。まさにこのような天皇(制)の表現をめぐる隠微なせめぎ合いの中において、様々の規範との関係性を時に踏襲し、時に逸脱するものとして同時代の学校文化は存していたのではなかろうか。

---

i 主に思想や制度面のから検討を行った堀尾輝久『天皇制国家と教育　近代日本教育思想史研究』(青木書店、1987)や久保義三『天皇制と教育』(三一書房、1991)などと共に、より個別具体的に学用品やイベントから検討を行った佐藤秀夫の一連の著作(『教育の文化史1　学校の構造』(阿吽社、2004)に多くを所収)や山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー(Ⅰ)　学校イベントの宗教的性格』(新泉社、1976)などを参照のこと。

ii 主要な先行論としては多木浩二『天皇の肖像』(岩波書店、1988[岩波文庫、2002])、T.フジタニ／米山リサ訳『天皇のページェント　近代日本の歴史民族誌から』(日本放送出版協会、1994)、原武史『可視化された帝国』(みすず書房、2001[増補版 2011])、若桑みどり『皇后の肖像　昭憲皇太后の表象と女性の国民化』(筑摩書房、2001)、北原恵「教科書のなかの「歴史/画」―天皇の視覚表象」(『歴史評論』634)、2003)などを挙げることができよう。





NII-Electronic Library Service